spiral

いとうこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｐｉｒａｌ

【Ｎコード】
Ｎ４２４０Ｕ

【作者名】
いとうこう

【あらすじ】
主人公・実はある日、隣のクラスの悠子に夢の話をされる。それまで、隣のクラスで、一年のときに習字の授業の席が隣同士だったという二人の関係だけだったのだが、何故彼女は実に夢の話などしたのだろうか。そこにはある、秘密が隠されていた。

彼女の夢（前書き）

一生懸命書きました。些細なことでいいので、感想など頂けたら、とても嬉しいです。

彼女の夢

猫の国の話。ある村に二匹の猫が生まれた。片方は凛々しい黒い毛が特徴な雄の黒子猫。もう片方は白い毛が可愛らしい雌の白子猫。二匹はとても仲良く育ち、将来を誓う仲になった。しかし、白子猫は遠くの村に引っ越しをしてしまうことになった。だから黒子猫は白子猫が引っ越しするときにいった。「大きくなったら君を迎えにいく」

やがて、黒子猫は大きな立派な黒猫に成長した。凛々しい黒い毛もさらに磨きが掛り、とても強そうな黒猫になった。そして、白猫との約束を果たす為に白猫の村に一匹だけでいった。しかし、黒猫は白猫に拒絶された。

白子猫はとても美しい白猫へと変貌を遂げていた。彼女は黒猫を煙たがり、彼女に纏わりつく他の猫達は彼を嘲笑った。彼女の美しい白い毛は周りの猫達を惹きつける。誰もが彼女を歩く度に鼻の下を伸ばして首を動かす。だが、黒猫の凛々しい黒い毛は不気味がられる。彼が横切る度に舌打ちが聞こえてくる。眉間にしわを寄せる奴もいれば、罵倒してくる奴だっている。

最初は彼女も彼との再開を喜んでくれた。しかし、会う回数を重ねるごとに彼女の様子に変化が起きてきた。徐々に態度がよそよそしくなり、彼を避けるようになった。そして、最終的に彼女は彼を拒絶した。

黒猫は村に帰ろうとも考えたが、白猫のことを諦められず彼女の住む村に残った。村に帰ればこんなに辛い目には遭わずに済む。だが、そうできないのは、あの約束が忘れられないからだ。あの約束を一日も忘れたことはなかった。それは彼女もそうであると彼は信じ込んでいた。どうしても彼女が自分を完全に嫌っているようには思えなかった。

白猫の拒絶の仕方は、はっきりとしないものだった。「もう、会わ

ない方がいいわ。あの約束はなかったことにして。」そう彼女は彼にいった。彼女が告げた一見絶望を漂わせるこの言葉に彼は希望を持ってしまった。

彼は一言も約束の話を彼女にしなかった。彼女が約束を覚えていてくれたことが彼は嬉しかった。だから、彼は周りが敵だけの村に住み続ける決心はした。

だが、彼はその決心した次の日に死んだ。白猫に纏わりつく猫達によって彼は殺された。村で彼の死に涙する猫が一匹だけいた。

夢の意味

「いまの物語どう思った」
悠子が橋下の席に座りながら訊ねてきた。
「え？　うーん、黒猫が可哀そうだったかな。」
おれは頭に『？』マークを浮かべながら答えた。
悠子は突然現れた。おれは机に伏せて眠っていた。そこに、机を突然「ドン、ドン」と叩かれたのだ。そして、顔を上げるとイラストに描かれる豚のような顔をした橋下が美女になっていた。橋下の席に悠子が座っていたのだ。
「ちょっと物語を考えたんだけど聞いてくれない。」と悠子は短いスカートから伸びる綺麗な足を横に向けていった。
「え？」とおれは突然の出来事に驚き、戸惑った。そして、戸惑いながらも、さっき授業が終わった直後に橋下が「ちょっと、うんちしてこようかな。」とぼやきながら席を立ったことを思い出す。
ああ、橋下はうんこに行ったんだ。そんなことを考えている間に悠子がおれの了承をとらずに話を始めた。
「違うよ。この物語にはどんな意味があると思う？」
悠子は少しアヒル唇気味の唇を更に尖らせた。
「意味？　意味なんてあるの？」
「あるよ。白猫はなんで黒猫のことを拒絶したと思う？」
「さぁ、わかんないよ、おれには。たぶん、黒猫のことを嫌いになったからじゃないの？」
「違うよ。白猫はまだ黒猫のことがまだ好きだったのよ。」
「じゃあ、なんで黒猫のことを拒絶したの？」
「それは、自分の価値が下がることを恐れたの。」
「自分の価値？」
「うん、黒猫と一緒にいることで自分も周りから笑われると思ったの。」

「ふーん、シビアな話だね。」
「そうよ。世の中そんな綺麗じゃない。いつだって自分が一番可愛い。そういう教訓があるのよ。きっと。」
悠子はおれの目をじっと見ていった。おれは自分でも顔が赤くなるのがわかった。人と話すときに相手の目を見て話すのは悠子の癖らしい。これは悠子と同じクラスの早瀬から聞いた話しだ。どうやら、この話は本当なんだな、とおれは感心する。早瀬はイギリス人の母を持つハーフで一年のとき同じ柔道部だった仲間だ。早瀬は三ヵ月、おれは半年で部活を辞めた。入部するきっかけは、特別な理由もあるわけでもなく、顧問の教師の熱心な勧誘に、柔道とはどんなスポーツなのだろうと好奇心からなんとなく入部しただけである。性格的に合わずに夏休みを終えて新学期が始まるとほぼ同時に辞めた。早瀬に至ってはゴールデンウィーク前から既に幽霊部員となり、夏休み前には完全に部から去っていた。
「きっとって、自分で考えた話しなんでしょ。」
「ううん、正確に言えば夢の話。」
「夢？　夢の話しか。ずいぶん、変わった夢を見るんだね。そんなしっかりした物語性のある夢を見るなんて、変な才能でもあるんじゃない。」
「ふっふふ、そうかも。」
悠子は妖しげな笑顔を浮かべる。妖しげに見えるのはおれが悠子に惚れているからかもしれない。
「そうだよ。一種の才能みたいなもんじゃん。それを生かして小説家にでもなれば。」
おれは思いつきで適当にいった。しかし、悠子はゆっくり首を横に振った。
「ううん、これは小説じゃなくて、絵本かな。」
「絵本？」おれは漫画でもなく小説でもなく、はたまた映画でもない絵本という選択が意外で驚いた。
「うん、これは絵本って決まっているの。」

「決まっているって、なんで絵本なの？　そんなシビアな話、絵本なんて似あわないよ。読んだ子どもは泣いちゃうかもしれないよ。」
「ふっふふ、大丈夫だよ。泣かないよ。この話を聞いた女の子は寝ちゃうのよ。きっと。」
　悠子はなにが大丈夫なのかわからないが決め付けるような言い方をした。
「そうかな？　きっと、黒猫の可哀そうな境遇に不憫がって寝むれそうにもないけど。」
おれは悠子の話していた物語では女の子は安らかに眠れるとは思えず首を傾げた。また、なんで女の子限定なのか不思議に思った。「でも、なんで女の子なの？」
「知らないの？　絵本っていうのは忙しいお父さんと娘の大事なコミュニケーションの道具なんだよ。よく覚えておいた方がいいよ。」
「そうなの？　別に息子でもいいような気がするけど。」
「ふふっふ、だってわたしは女の子だし。」
　悠子ははしゃぐように笑った。
「なにそれ？　じゃあ、おれは男の子だよ。」
　おれは意味がわからなかったけど、とりあえず胸を張った。だが、悠子はおれのいうことには耳を貸さずに「でもね。」と続けた。
「この物語には続きがあるんだ。」
「続き？　黒猫が死んで、白猫が泣く。誰も救いのない話じゃないの？」
「ふっふふ、だってそれじゃあ、絵本にならないでしょ。」
　悠子がいたずらな顔を見せた。
「だから、さっきおれはそれを指摘したじゃないか。」
「でも、続きがあるとは思わなかったでしょ？」
　悠子は何食わぬ顔でいう。
「いや、そんなわかるわけがないじゃん。サッカー選手がデジカメ投げるよりよっぽど予想外だよ。」
おれは悠子の顔を見ながら苦笑する。しかし、悠子はにこりともせ

ず「じゃあ、どうやったら二人は幸せになれると思う？」とおれの目を見て訊ねてきた。
「いや、黒猫は死んじゃったし、幸せにはなれないんじゃない。」
「死んだらそれで終わりなの？」
悠子の熱のこもった言葉がおれの耳に飛び込んできた。おれは思わず悠子の顔を見直す。真剣な顔をしている。声も軽やかではあるが、引き締まっていた。
普段なら笑うところかもしれなかったが、小心者のおれは悠子の真剣さに圧倒されて「えっ、そうじゃないの？」と自分の答えに不安に持ってしまった。
「ずっと」と悠子が短く発した。「白猫は黒猫を想って生きていくことだってできるんじゃない。」
悠子は相も変わらず至極真剣な顔だった。
「はっはは。なにそれ。」
おれは思わず笑った。悠子が白馬の王子様を本気で信じている女の子みたいなことを言っているようで急に可笑しくなった。
「なに？　小学生みたいな台詞とでも言いたいの？」
悠子は頬を膨らませる。
「いや、別に。そんなことないよ。」
「嘘よ。嘘吐いているときのあなたは顔に出るからすぐにわかるよ。」
おれは急な指摘に驚き手を顔に当てた。確かに少しにやついた顔をしていたかもしれない。
「ふっふふ、今度は驚いた顔している。」
驚いてもいたが、照れの方が強かった。いきなり『あなた』と呼ばれたのが恥ずかしかった。
「いや、だって可笑しなことというから。」
「可笑しなことなんていった？」悠子が首を傾げる。
『可笑しなことなんていった？』と問いかけられれば言いたいことはたくさんあった。まず、さっきの物語はなんだったのか。それ

に、なんでそれをおれに話したのか。おれと悠子はそんなに親しくない。だから、悠子に嘘なんて吐いた覚えなどない。それなのに、どうしておれが嘘を吐くときに顔に出ることなんて知っているのか。他にも色々あった。悠子とこうゆうやり取りをするのは二度目だったのだ。だから、色々問い詰めるチャンスだと思った。だが、出てきた言葉は「いや、おれそんなに顔に出るタイプかな？」と自分でもがっかりするほどに間抜けな返答だった。

「出るよ。両親のお墨付きでしょ。『あんたは嘘を吐けない正直ものね。』って。」妖艶な笑顔を浮かべた。

「なんで・・・」とおれが言い掛けたとき十分の休み時間の終わりを告げるチャイムがそれを遮った。すると、悠子は「もうすぐ、休み時間が終わっちゃったから行くね。」とそのまま嬉しそうに笑みを浮かべて悠子は橋下の椅子から腰を上げた。

おれは二年二組の教室から出ていく悠子の後ろ姿を眺めていた。これは、おれの主観だが悠子はこの学年で一番可愛い。いや、校内でもトップだ。身長はおれとほぼ同じぐらいだ。頭の後ろには二年の頃から付け始めた髪飾りが付いている。細かい部分は語れないが、ルックスなら悠子のことを語ることはできる。だが、悠子がどうゆう人間なのか、中身を問われれば閉口してしまう。おれは悠子のことをあんまり知らないのだ。

出会いと自惚れと挫折

悠子との出会いは、高校入学してすぐのことだった。おれの通う高校には入学前のアンケートが二つあった。一つは修学旅行についてだ。沖縄と北海道はどちらがいいかというものだった。おれは二学年上にいる同じ高校を通っている兄が、北海道は良かった、言っていたので北海道を選んだが今になれば沖縄にしておけば良かったと後悔している。おれの高校は何を血迷ったのか修学旅行の日程を十二月に持ってきたのだ。そのせいで十二月におれ達は十二月に北海道に行く予定が入っているのだ。

だが、もう一つのアンケートについては全くの後悔していない。むしろ、運命を感じている。そのアンケートの内容は選択授業についてのアンケートだ。おれの高校には『芸術』という授業がある。『書道』か『音楽』のどちらかを選択するアンケートでおれは『書道』を選んだ結果、週二回の書道の授業で悠子の隣に座る権利を得たのだ。書道も音楽も苦手だったおれは苦渋の選択を迫られたわけだったが、思わず逃げ込んだ先が天国だったというわけだ。

おれは勝手に悠子との出会いに運命を感じていた。おれは本来悠子の隣の席ではなかったのだ。最初はおれの席は悠子の斜め前の席だった。しかし、斉藤という男の席がなく、斉藤の席の分が一つスライドされて悠子と隣になったのだ。そのときのおれの斉藤への感謝の気持ちは言葉では言い表せない。もう斉藤の手を取って「君が地球上に存在してくれていて良かった。」と言いたいぐらいだった。それくらいの衝撃だったのだ。悠子との出会いは。

悠子は変わり者である。書道の最初の授業は自己紹介という簡単なものだったのだが、おれが自己紹介を終えた直後に長方形のおれと悠子が共同で使う机を「ドン、ドン」と平手で叩き、「名前はなんていうの？」と堂々と聞いてきたくらいだ。

それから悠子が机を「ドン、ドン」と叩いて質問してくるのは決

まり事になっていた。事あるごとに「家はどこにあるの？」、「部活はなにやっているの？」、「この間、廊下であるいているところ見たよ。」と簡単なやりとりだったが、いつの間にかおれの生活スケジュールの中心は書道の時間になっていた。書道の授業が終わった直後から次の書道の授業へのカウントダウンが開始されていたのだ。

だが、結局は、おれはただの悠子の習字の時間の隣人となっただけだった。さらにいえば地味な顔をした隣人だ。

おれは天井向けてテニスボールを投げながらいつの間にか自問自答していた。悠子が自分に話し掛けてくる理由についてだ。悠子に話し掛けられてから残りの授業はほぼ悠子のことで頭が一杯になり、授業の内容など頭に入ってこなかった。今だってそうだ。なんでテニスボールが家の中にあるのか、とくだらないことを考えていたのに、いまでは悠子の顔が頭に浮かんでいる。悠子の話し声が頭にリピートされている。

悠子はおれに少ながらず良い好意を抱いているとおれは考えている。しかし、それは俗にいう『ラブ』や『愛』ではなく『ライク』や『友達と好き』というものだ。この考えは、ある『事件』から考えられる論理的思考を元にした仮説である。だから、悠子に話し掛けられる度におれは戸惑うのだ。何で悠子はおれに話し掛けてくるのか、と考え込んでしまうのだ。その度に、おれは地味な顔した男だということを必死に思い出す。

『事件』は去年の九月末に起きた。おれは部活を辞めて、少し肩の荷が下りてアルバイトでも始めようかと悩んでいる頃だった。そんな秋真っ盛りな時期で『書道』の時間を前に浮足立っていたおれに大きな事件が起きたのだ。

書道は書道室、音楽は音楽室、で二つのクラス合同で行われる。また、書道室と音楽室は向かい合わせに作られており、前の授業が終わると同時に教室から書道室、音楽室の移動が二クラスで同時に行

われる。その、移動中の廊下で事件は起きたのだ。
　おれは、天然パーマが特徴で夏休みの間に煙草デビューした藤原とギャル男で月に二回は日焼けサロンに通っているという必要以上に肌が黒い名倉と廊下を歩いていた。藤原と名倉は煙草の話で盛り上がっており、おれは話について行けずに少し孤立した形で二人の少し前を歩いていた。教室から書道室、音楽室への移動には階段を上がり、校内で一番直線距離のある昇降口前を通過する必要があった。『V』字型の階段を上がり、『L』字型の角を曲がると校内で一番直線距離のある昇降口前の廊下に悠子が友達と二人で十メートルぐらい先を歩いていた。悠子達の歩くスピードは遅く、おれ達はすぐに追いついてしまい、同じ教室を目指す人間を抜くのもおかしな話なので自然とおれ達の歩くスピードも悠子達と同じペースですぐ後ろを歩き始めた。恐らく意識しているのはおれだけだっただろう。藤原と名倉はいつの間に話題を変えてバイクの話を始め、悠子も友達と盛り上がっており、おれだけが黙ったまま所々にガムがへばり付いた廊下を歩いていた。
　おれは悠子の後ろ姿を目に焼き付けるぐらいに見つめていた。なんとなく、悠子の髪型が気になっていたからだ。出会ったとき肩に掛っていた髪は五月頃に切られ、一旦ショートカットになっていたが、再び出会った頃と同じくらいまで髪は伸びていた。女の子が髪を伸ばす、切るには意味がある、と早瀬から柔道部時代に聞いたことがあった。端正な顔立ちをしている早瀬が言うとそれなりに説得力があった。だが、早瀬は夏休み前に悠子に告白して見事に撃沈している。早瀬はこの敗因について運が悪かったと語っており、端正な顔立ちをしている早瀬が言うと納得できた。また、そう言う早瀬の携帯には少しふくよかな女の子と撮られた一枚のプリクラが貼られており、女の子に傷つけられた傷を癒すのには女の子に治療してもらうのが一番だ、と男前に語っていた。そんな端正な顔立ちをしている早瀬が言うと、はいそうですか、という感じだった。
　書道室、音楽室を目の前にして、おれの熱い視線に気付いたのか、

それとも後ろに誰が歩いているのか気になったのか悠子の友達が後ろをちらりと見た。一瞬おれと目が合う。確かこの女子の名前は宮乃という名前だったはずだ。可愛い女の子だったので覚えていた。男子高校生なんてそんなもんだ。興味ある人の名前は名字だけでも覚えているものだ。宮乃は身長が悠子の顎程しかなく、恐らく百五十センチぐらいで、肌が白く、丸顔でショートカットが良く似合う女の子だ。

宮乃はおれと目が合うとすぐに顔を前に向き直し、悠子に小声で喋り始めた。おれに聞こえない様にしたつもりだったのか、小声だったがすぐ後ろを歩くおれには丸聞こえだった。

「ねぇ、後ろに歩く男の子可愛くない？」

宮乃が悠子に小声でいった。恐らくおれと悠子が書道の席で隣同士だということを知らないのだろう。宮乃の選択授業は音楽だった。

悠子は後ろをちらりと見た。自然とおれと目が合う。おれは悠子がこの問いになんて返すのかと期待を胸に待った。

「えぇ、顔地味過ぎない。」

悠子は眉を顰めていった。おれは後ろから悠子の横顔を見ながら、心臓を握りつぶされる思いだった。一瞬、頭が真っ白になってしまった。好きな女の子に「顔が地味だ。」と言われてショックを受けない男子高校生なんていないだろう。

「そうかなぁ。でもね、あの子お兄ちゃんがいるんだよ。」

宮乃は何故か二つ上にいる兄の存在を知っていた。そして、何故か悠子に「あの子には兄がいるんだ」と主張を始めて、さらには事実証明を取る為に体を反転させて「この高校にお兄ちゃんいるよね？」とおれに質問してきた。

「えっ、ああ、いるけど・・・・」

おれは急に質問されて驚いたのとショックが酷く小さな声で答えた。今思えば、顔が地味なのと兄の存在がどう関係があるのかはわからないが、宮乃なりのフォローだったのかもしれない。

宮乃はおれの「イエス」の答えを聞いて悠子に「ねぇ、言った通り

でしょ。」と微笑みながら言うと、そのまま音楽室に消え、悠子もそれに続く様に書道室に入って行った。おれは藤原と名倉に肩を掴まれ「おい、どうしたんだ？　なにがあったんだよ。」と驚きながら訊ねられたが「おれには兄がいる」と答えるのが精一杯だった。それでも、悠子は机を「ドン、ドン」と叩いて、「ねぇ、体育祭はなに出るの？」、「どうして柔道部辞めたの？」とどうでもいい質問をしてきた。

正直言えば、おれは悠子が自分に気があるのではないかと、うぬ惚れていた。だから、早瀬が悠子のことが好きだといっても焦らなかったし、早瀬が振られたときはやっぱりな、と確信すらしていた。さらにいえば、早瀬が悠子に傷つけられた傷を癒すべく、新しい女に走ったときは安心すら覚えた。そんな淡い希望を打ち砕かれたのに、おれは悠子に話し掛けられるたびに、また新たな希望が生まれてくる。だから、おれは悠子に話し掛けられるたびに、悠子の瞳に映る自分は地味な顔をした男だということを忘れないようにした。

娘と絵本

病院の帰りに娘とランチを食べた。娘がオムライスを食べたいというのでこの辺で一番大きいショッピングセンター内にある洋食屋を選んだ。食事の提供がとても早く、頼んでから五分も経たずにオムライスが運ばれたのには驚いた。しかし、食事の後の感想としては料理にはもう少し時間を掛けなければいけないということだ。それでも、娘は口元にデミグラスソースを付けながら「オムライスおいしーね。」と笑っていたので問題はない。その後に、娘が本屋に行きたいと言うので三階の映画館の隣にある本屋に行くことにした。娘は本屋に入るなりに絵本コーナーに真っ先に向かった。おぼつかない足取りだがなんとか転ばずに辿り着くと振りかえって僕の目を見る。僕は思わず笑うと娘も笑った。

娘が絵本を読むようになったのは僕の母、つまり娘から見れば祖母と図書館に訪れたときに絵本を読んでもらったことがきっかけだった。それ以来、娘の遊び道具はＤＶＤから絵本となった。とはいっても、娘だけでは絵本を読めないので読むのは僕の仕事である。仕事が忙しくて中々娘と遊ぶことができなかったので、絵本は僕としても娘とコミュニケーションを取ることができる大切なツールとなっていた。

娘は子どもでも簡単に絵本を取れるように低く設置された本棚から一冊の絵本を選んで僕の元に持ってくる。

「これがいいのか？」

僕は娘から本を受け取り、しゃがみながら訊ねる。

「あい。」

娘は満面の笑みで頷く。

僕は娘の持ってきた絵本をパラパラと捲った。どうやら、猫が主人公の話のようだった。タイトルは『くろとしろのやくそく』という絵本としてはあまりふさわしくないような気がした。でもまぁ、

せっかく娘が自分で選んだ絵本なのだからと思い僕は何も言わず買うことにした。

娘は家に着くと早速僕に絵本を読むように「これ、読むの」と絵本を僕に差しだしてきた。僕は絵本を受け取り、布団で寝転びながら娘に読み聞かせる。

タイトルでも感じたことだが、この絵本は絵本らしからぬ内容だった。全体的に内容が暗い。それでも娘は場面に合わせ表情を変える。子どもというのは色んな表情を持っているのだな、と僕は感心する。僕は面白くなり、なるべく娘に本の内容が伝わるように感情を込めて読んだ。

物語の終盤な差しかかったところで、エンディングを待たずに娘は寝てしまった。僕は娘に毛布を掛けて、絵本を本棚に仕舞おうと手に取った。

その瞬間、僕の頭に昔の記憶が蘇った。僕は慌てて絵本を開くと物語の最後のページを一気に開いた。

マザコンなサッカー選手の犯す反則

「それでさぁ、私が電話したらノブのお母さんが出るんだよ。信じられる？」
南は彼氏と彼氏の母親への不信感を口にしている。ハンバーガーショップに入ってからずっとだ。
「へぇ～、なんで母親が息子の電話にでるの？」
わたしは渋々意見する。
「さぁ、知らないわよ。自分で起こしてって言うから電話してあげたのにノブのお母さんが電話に出てあたしに何って言ったと思う？」
南は彼氏とその母親に相当な恨みがあるのか、眉間に皺を寄せてテーブルを平手で叩いた。その衝撃でわたしの前にあるオレンジジュースの入った入れ物が少し揺れた。
「何って言われたの？」
わたしはオレンジジュースを慌てて押さえて訊ねる。
「『ごめんなさい、ノブをあんまり甘やかさないでほしいの。』って言ったのよ。」
「はっは、なにそれ。」
「それだけじゃないのよ。そのあとあたしに聞こえるように『ノブ、明日からはわたしが起こしてあげるからね。』とか、あたしに聞こえるように言うんだよ。」
「なにそれ？　それで、その大学生の彼はなんて言ったの？」
「『うん、ありがとう。お母さん』だって。」
南は彼氏のモノマネのつもりなのか馬鹿みたいな顔と声でいった。
「あはっは、ありがとう、お母さんって、それマザコンなんじゃない。」
「そうなのよ。彼はマザコンだったのよ。」
南は顔を歪めていった。
「それは残念。」

「ふん、だからあたしは言ってやったのよ。あんたはマザコンだって」南はそう言うとフライドポテトを口に入れた。
「いったの？」わたしはずいぶんストレートにいったなと感心する。そして、彼氏の反応が気になり「それで？　彼は何ていったの？」と訊ねた。
「『南の親は片親だからわかんないんだ』だって。」
南はまた例のモノマネ口調でいった。
「何それ、感じ悪い。マザコンに片親とか関係あるの？」
「そうよね。あたしのお母さんは離婚したけどすごく幸せなんだよ。それであたし頭来ちゃってあんたの母親は異常者だって言ってやったのよ。」
「言っちゃったんだ。」
「うん、そしたらね・・・・」南はそこで言葉を一度止めて、ブレザーを脱いでワイシャツの腕を捲くった。
「これよ。」
「うわぁぁ、大丈夫？　どうしたの、殴られたの？」
南の腕には痛々しい青紫色の痣があった。
「ううん、デジカメよ。」
南が首を横に振った。
「デジカメ？」
「うん、あいつ、あたしに向かってデジカメを投げてきたのよ。」
南はブレザーを着直しながらいった。
「デジカメを？　・・・それは痛そうだね。」
わたしは想像力を精一杯に使って、デジカメを投げるシチュエーションを考えていた。もし、わたしが南の彼ならデジカメを投げる前に、デジカメの安否を考えそうだが南の彼はそんなことを気にする余裕もなかったのだろうか。それとも、他に南を程々に痛めつける道具がなかったのだろうか。私の頭の中で色々疑問が残った。そもそも、デジカメを投げつけられて痛いのだろうか。
「痛いわよ。しかも、あいつわざと痛くするためにご丁寧にケース

から取り出して投げつけてきたのよ。」
「意外と冷静なんだね。」
わたしは不謹慎だが興奮した男が懸命にデジカメをケースから取りだして愛する彼女に投げつける光景を想像して、こっそりほくそ笑んだ。
「そうよ、それであいつデジカメ投げつけてから、痛がるあたしを見て、『ごめんよ。でも、君にも悪いところはあっただろ。』とか言ってくるのよ、あのマザコン暴力男。」
「なにそれ？　そんなに簡単に謝るなら最初からデジカメなんて投げなければいいのに。」
「そうよね。なにが『ごめんよ。』よ。馬鹿じゃないのって感じ。あたしは『あなたの親は異常者だ』って訴えただけなのよ。それなのにデジカメ投げつけられて『君も悪い』ってあたしはデジカメ投げつけられるのと同等なことを言ったわけ？」
南は興奮した調子でわたしに訴える。
「そうゆう問題なのかな？」
わたしは首を傾げた。南は彼の怒りを買ったからデジカメを投げつけられたのだろう。怒った相手に等価交換を望むのは少し違うのではないかとわたしは思う。
「そうゆう問題よ。だけどね、唯一助かったことがあるのよ。」
「助かったこと？　デジカメ投げつけられて？」
「うん、あいつね、大学でサッカーやっているのよ。」
「サッカー？　それがどうして南にデジカメを投げつけて、南が助かるの？」
「だって、もしあいつが野球をやっていたら怖くない？」
南は眉を顰めていった。
「野球だったら怖い？　どうゆう意味？」
わたしは意味がわからず聞き返す。
「だって、野球は投げるでしょ。でもサッカーは蹴るじゃない。」
「うん、そうだね。でも、それがどうしたの？」

わたしはスポーツに関しては詳しくないが、野球とサッカーがどうゆうスポーツかは大雑把ではあるが知っていた。だが、それがどう南を救ったのかはわたしにはわからなかった。
「だから」と南はそこを強調するようにして、言葉を一度止めた。
「もし、あいつが野球をしていたらわたしの腕はこんなものじゃ済まなかったのよ。」
南は青痣のある腕をポンポンと叩きながらいった。
「そうなのかなぁ？」
わたしはまた首を傾げた。野球選手ではなくサッカー選手だったから助かったという理屈はわたしには理解できなかった。本当に助かったなら、あんな痛々しい青痣はつかないだろう。
「そうよ、きっと不幸中の幸いよ。」
南は冗談で言っているようではなかった。真面目な面持ちだった。
「不幸中の幸いねぇ。」わたしはため息を吐くように漏らした。
南が多少なりにも彼氏がマザコンだったのにショックを受けていて、無理して前を向こうとしているのかもしれないとわたしは思った。だから、何か気の効いたことを言った方がいいのではないかと思い「でも、サッカーって手をつかったら反則だよね。」とわたしなりの精一杯のユーモア溢れる一言をいった。
すると、南を大きく両手を叩いた。「あっ、確かに。あいつ反則してんじゃん。ったく。サッカー選手ならデジカメをシュートしろって感じ。」
南はわたしを指差して嬉しそうにいった。
「ふっふふ、そうだね。」わたしは南がわたしの言葉に反応してくれたので心の中で胸を撫で下ろす。すると南は「ケーキ屋さんにはいったのに店内の商品が全部和菓子なぐらいの反則よね。」と意味のわからない譬えをした。
「はっは、それはなんか拍子抜けするね。『えっ、店の前の看板はなに？ 』って感じ？ 『わたしのケーキを食べるモードになった舌をどうしてくれるの？ 』みたいな。」

わたしは無理して南のいうことに合わせる。

「そうよ。見た目は爽やかなサッカーをしている大学生。でも、中身はマザコンでデジカメを蹴らないで投げる反則暴力男よ。」

ファザーコンプレックス

「そういえば、ハルちゃんの家も片親だよね。」
一通り彼氏の悪口を言い終えると南はすっきりした顔で思い出したようにいった。
「うん、うちは死別だけどね。」
「そっか、いつ頃死んじゃったの？」
南は無遠慮に訊ねてきた。
「物心がつく前なんだ。だからお母さんの記憶とか一切ないんだよね。」
「へぇー、じゃあ、ハルちゃんのお父さんずっと独身なの？」
「うん、そうだけど・・・南のお母さんは再婚とか考えているの？」
「うーん、どうだろ。再婚をしたいとは聞いたことないけど、お母さんの彼氏と食事とかはしたことあるよ。」
「嘘？　お母さんの彼氏と食事？　えぇ、何か気まずいとかないの？　お父さんになるかもしれない人でしょ。」
「そんな大袈裟なもんじゃないよ。あたしもう高校生なんだから。まぁ、お母さんが選んだ人ならいいよって感じ。あとは、二人の自由にしなさいとか、そんな感じよ。」
南は娘の結婚に理解のある母親と父親みたいな台詞を吐く。
「えぇ、なんか、さっぱりしてるね。そんなもんなのかなぁ。」
わたしは南の母を自分の父と置き変えて想像してみた。父の彼女と食事。テーブルを挟んで父の彼女と向かい合って食事など考えられない。まず、どんな話しをするのだろうか。無難に『学校は楽しい？』とか訊ねられるのだろうか。それとも『彼氏はいるの？』とか少し踏み込んだ話しをされるのだろうか。それか、わたしが『父とはどこで出会ったんですか？』とか訊ねなければいけないのだろうか。それでもし、『お父さんとはキャバクラで出会ったのよ。お父さんは、あたしの常連なんだから。もう、あたしにメロメロよ。』

とかいきなり対抗心を燃やされたら、わたしはどうすればいいのだろか。それか、もしすごく綺麗でいい人だったらわたしはどうすればいいのだろう。もし、父が再婚したら「お母さん」と呼ばなければならないのか。母の記憶は一切ないが母意外の人間を「お母さん」と呼ぶのには抵抗があった。

「ハルちゃんのお父さんにだって、きっと彼女ぐらい、いるんじゃない。」南がにやついた顔でいった。

そんなはずはない、と思った。「なんで？」

「なんでって。」と南はクスリと笑い「ハルちゃんのお父さんだって男なんだから、彼女ぐらいいるんじゃない。」

「でも、わたし聞いたことないよ。」

「そりゃあ、男と女は違うよ。あたしの場合はお母さんだから同姓ということでそうゆう話しはするかもしれないけど、父と娘じゃそうゆうのもなさそうだし・・・ただ言いにくいだけかもよ。」

南の目は面白がっているようにも見えた。

「ぜったいない。だってうちのお父さん、そうゆうタイプじゃないし。」

「きっとハルちゃんの前だからそうなんだよ。娘にはそうゆう一面は見せないんじゃない。」

「そんなことないよ。それに、うちのお父さんは女にもてるってタイプの顔じゃないし。」

わたしは父の顔を思い出しながら言った。父の顔には派手さが一切なく、去年の父の誕生日に赤いセーターをプレゼントしたら「自分の顔より派手な服を着ると落ちつかないんだよな。」とセーターに袖を通してぼやいていたぐらいだった。

「わかんないよ、なんだかんだいってもハルちゃんのお父さんだし。あっ、もしかしたら意外に女たらしだったりして。」

「だから、ぜったいにない。わたしのお父さんに限ってそんなことはないの。」

わたしは断固として認めなかった。

「ふーん、そんなにむきにならなくたっていいじゃん。なに、その『うちの子に限って』みたいな教育に自信のある親みたいな言い草。」
「あるよ。だってわたしのお父さんだし。」
「え～、なにハルちゃんはファザコン。あたしの周りはそんなのばっかりなの。」
南は大袈裟に口を押さえて驚いた格好をとった。
「そんな大袈裟なもんじゃないよ。ただ、身内としてしっかりして欲しいと願っているだけ。」
「そうかなぁ、なんだかんだいって、大好きなお父さんがどこそこの女に取られるのが嫌なんじゃないの？」
「違うって。」わたしは思わず苦笑した。少し熱くなりすぎたことを反省して、気を静める為にコーラを一口飲んだ。
「じゃあ、もしお父さんが再婚するっていったらどうする？」
「そりゃあ、おめでとうって祝福するよ。」
「本当に？」南はいぶかしむ顔をするので「もしあったらね。でも、たぶんないから。」と答えたあとにコーラをもう一口飲んだ。
「えぇ、やっぱり・・・・」南は眉を顰め「それって・・・・」と南が続けたところでわたしが右手に持っていたコーラをテーブルの上に置いて「違うの。」と遮った。
「わたしはお父さんにお母さんをずっと愛していてもらいたいの。」
南は肩をすくめ「・・・なに、その小学生みたいな意見？」と首を傾げた。
「だから、わたしはお母さんをずっと愛していてほしいの。忘れないでほしいの。」
わたしはもう一度言った。
「でも、それってお父さん寂しいんじゃない。」
「なんで？」
「なんでって」南はまた苦笑して「だって、好きな人がそばにいないのは寂しいんじゃない？」

「でも、わたしがいるよ。」
「いや、そうだけど・・・」と南は間を少し空けて「やっぱり、ハルちゃんはファザコンだよ。」と片眉を上げた。

再会

わたしは家に帰ると父の部屋に真っ先に向かった。わたしと父の住むアパートは二人で住むには十分な広さがある。食事をする居間、わたしの部屋、父の部屋、父の寝室兼客間となっている和室の四つの部屋があった。

わたしは南に言われた「ファザコン」という言葉も気になっていたがそちらよりも父に彼女がいる、という方が気がかりだった。

わたしはまず父の机の前に立った。父の机の上には写真が二枚飾られている。わたしと母の写真だ。そんなはずないな、わたしは改めて思う。

机の中を開けると几帳面にそれぞれ仕分けされた定規や蛍光ペン、シャーペンの芯など未開封の文房具が揃えられていた。父の几帳面さが窺える。あとは、仕事関係らしき書類が山積みになっているだけだった。

書籍の方は本や書類が多い。少し手を伸ばすが意味のわからない仕事関係の本や書類が一杯で調査する気分が削がれた。適当に取って読んでみるが、専門用語ばかりですぐに書籍に戻し、寝室を調べることにした。

寝室に入ると押入れの襖を開ける。二段で仕切られた下の奥の方に段ボール箱が置かれていたことをわたしは知っていた。段ボールは全部で四つあり、その内の一つのみかん箱の段ボール箱を取り出して中を開ける。不思議と父に対する後ろめたさは一切湧いてはこなかった。強いて言えば、仏壇に飾られている母の遺影が気になった。『わたしの旦那が浮気なんかするはずないでしょ。』とでも言っている、そんな自信の満ち溢れる笑顔だ。きっと、その満ち溢れんばかりの自信には、それを裏付ける実績があるのだろう。そんな推測できる美貌がある。

段ボールの中身は父の思い出の品が詰まっていた。胴着や野球のグ

ローブ、小、中学校の卒業アルバム、父が幼稚園の頃に作った工作らしきものなどがしきりに詰めてあった。目的のものが見つからないので二つ目を取りだして開ける。こちらはわたしの思い出の品が入っており、子どもの頃の絵本やおもちゃが入っていた。三つ目も同様にわたしの幼稚園や小学校のときの鞄や制服、体操服が入っていた。

しかし、四つ目の段ボール箱は様子が違った。持った瞬間に他の段ボール箱よりも以上に軽かった。中身がないので持ち上げた瞬間に段ボール箱の中の物が動くぐらいだった。

なんだか嫌な予感がした。

わたしは少し身構えるように目を強く瞑って段ボール箱は開けた。怖いもの見たさ、という言葉が頭に浮かぶ。自分の知らない父の姿の尻尾を掴んでしまったような気がしいるのに、わたしは高揚していた。

「なにこれ？」

しかし、わたしは中を見て目を丸くした。段ボール箱の中身は、一枚の色紙、輪ゴムで止められた円状の紙、一冊の絵本、そして高校の卒業アルバムだった。

わたしは段ボール箱の中身の素朴さに拍子抜けして、自分の知らない父がいないことに胸を撫で下ろし、なんの脈絡もなさそうな中身のバラエティさに首を傾げる。

とりあえず、わたしは卒業アルバムを手に取ってパラパラと捲った。二十年以上も昔のものだから、時代の古さは否めない。だが、それ以上にわたしが感じるのは時代の古さは強すぎる個性を面白可笑しくさせるのか、ということだった。奇抜な格好をしている高校生は見事にわたしの笑いの壺を捉えた。わたしは父のアルバムを片手に腹を抱えて一人でゲラゲラと笑った。わたしたちも二十年後にはこうなるのだろうか。

三年二組のページを開くと若き高校時代の父がいた。地味な顔立ちをしている。だが、小動物のような可愛さもある。

それからわたしはアルバムの中で父を捜した。父の周りには肌の黒い男や天然パーマの男、豚を彷彿させる男など父の周りには男しかいなく、地味な青春時代を過ごした高校生活だったんだとわたしは勝手な解釈をした。

アルバムを一通り見ると、段ボール箱にアルバムを戻して、絵本を手に取った。『くろとしろのやくそく』というタイトルだった。わたしは三，四歳の頃に絵本に凝っていた時期があったので、父がわたしに与えた絵本だということは想像できた。だが、何故、この絵本だけ他の絵本とは別にこの段ボール箱に入れられているのだろうか、と疑問に思う。

絵本は猫の話だった。少し読むつもりだったが、いつの間にかに夢中になっていて気がつけば全部読んでいた。内容は全体的に暗い。作者がなにを考え書いたのか、それなりに教訓はあるような気がした。だが、最後の最後でハッピーエンドで終わるものの、強引さが否めない。けど、不思議と読み終えた後に心地良さがあった。懐かしさといった方がしっくりくるのかもしれない。

父の大事なもの

「なにこれ？」思わず独り言が出た。輪ゴムを取って広げると、それは一枚の賞状だった。なんの賞状だろう、少し胸が躍った。もしかしたら、父は娘に隠している優れた才能があったのではないかと推測もしたが、賞状はただの一年間無遅刻無欠席で学校に登校したことを称える栄えある賞状だった。賞状には父の名前には二年二組と父の名前が記入されている。

「なんで、こんなもの。」もう一度独り言を呟く。一年間寝坊もせずに学校に遅刻をしないのはたいへんだ。風邪をひいた日もあったかもしれない。でも、何十年も大事に保管しておくものなのだろうか、と疑問に思う。だがすぐに、額にいれて大事に飾っているわけでもないのだから別にいいか、と思い直したとき玄関のドアが開く独特な音がした。

「ただいま～」父の疲れ切った声が部屋に響いく。わたしは急いで段ボール箱を押入れに戻した。

部屋の襖を開けると父は既に居間に来ていて、冷蔵庫から缶の発泡酒を取りだしていた。

「あれ？　なにしてんの？」スーツ姿の父が発泡酒を片手にいった。訝しがる様子はなく、心底不思議そうな顔をしている。テーブルの上には本日の夕飯であろう、弁当が真っ白なビニール袋に入って置いてあった。

「ううん、ちょっと探し物。」わたしは言葉を濁す。

「ふーん、そうか。」父はそんな言葉で納得したのか、首を伸ばすようにして、ネクタイを緩める。そして、缶を開けて発泡酒を一口飲んだ。

「薬は飲んだ？」

父がテーブルの上に缶を置いて訊ねてきた。その言葉は馴染みなものなので「いま、飲もうと思っていたところ。」とわたしも馴染

みの返答をする。
「そうか、じゃあ、仕方ないな。」と父はぼやいて、もう一口発泡酒を飲んだ。そして、着替える為に寝室へと姿を消す。わたしは冷蔵庫の横にある薬箱から三種類の薬を取り出して、グラスに水を注ぎ喉に流し込む。
　そのまま冷蔵庫を開け、コーヒー牛乳を取りだす。薬を飲んだグラスにコーヒー牛乳を注いでコーヒー牛乳は冷蔵庫に仕舞う。椅子に座ってテレビのリモコンを手に取ってテレビのスイッチを入れた。
　画面には野球中継が映し出された。片方はわたしでも知っている東京を本拠地にしている人気球団だ。普段ならすぐにチャンネルを回すところだったが、わたしは南の言っていたことを思い出していた。
「なぁ、なんでこれが置いてあるんだ。」
　寝室の襖を開けるなりに父が言った。そして「あっ、日本シリーズ今日開幕か。」と一瞬明るい顔を見せた後、「あ～、負けてるな。」と顔を歪めた。
父の片手には父の大事な記念品の皆勤賞の賞状があった。わたしは焦って仕舞い忘れたのかと心の中で舌打ちする。
「ごめん、さっき探し物しているときに出して・・・出しっぱなしだったのかな？　ごめん。」
「おいおい、気を付けてよ。大切なものなんだから。」
　父は口を尖らせた。そんなに大切なら片手ではなく両手でしっかり持て、と言いたくなったが「ごめんね。」と我慢して謝る。
「本当に大切なものなんだ。」
　父はもう一度言って賞状をテレビの上に置いた。そんなに大事ならテレビの上ではなくて、もっと額に仕舞うとかすればいいのに、と本当に大事なのか疑いたくなる。
「でも、ただの皆勤賞でしょ。そんなに記念になるとは思えないけど。」
　わたしは愉快と同情を半分ずつ感じつつ、揶揄する。

「皆勤賞を侮るなよ。」
父は椅子を引いてわたしの向かい側に座った。そして、ビニール袋から弁当を取り出してわたしの前に置く。弁当はわたしの好きな生姜焼き弁当だった。
「別に侮ってはないよ。わたしが取ろうとしても絶対に無理だし。」
「ハルは母さんに似て、寝坊症だもんな。」父は目尻を下げる。そして、タイムカードでもあれば面白いのにな、と意味のわからないことを可笑しそうに呟いた。
「それだけじゃないよ。それ以前の問題だよ。」
テレビの中で歓声が沸いた。負けているチームの二枚目の三番バッターが逆転のスリーランホームランを打ったらしい。だが、父はテレビに一瞥もせず「でもな、これはただの皆勤賞じゃないんだ。」と小さく笑った。
「ただの皆勤賞じゃないって、どうゆうこと？　お父さんだけがその年皆勤賞だけだったとか。」
わたしは自分で言っておきながらも、それでも大切に保管しておくのは違うと思った。こうゆうのは、いらないけど捨てられないもの、とかに分類される気がする。大切だと言い張る人は少ない気がした。そもそも、皆勤賞に普通と特別があるのだろうか。
「いや、そうゆう具体的なことじゃなくて・・・」
父は言葉を詰まらせ、適切な言葉を探る様に口に手を当て黙り込んだ。
「なに、具体的なことじゃないって。」
わたしは合いの手を入れるように訊ねた。だが、父はわたしの発した言葉に反応せずに黙り込んだままだった。黙り込む時間があまりに長いので二人で使うには少し大きい横長のテーブルに手を着いてわたしは父の顔を覗き込む。そこでやっと父が反応した。
「あっ、ごめん、ごめん。ちょっと考え事しちゃってさ。」
「考え事？　なにを？」
「思い入れだよ。」

父は朗らかな声でいった。
「思い入れ？」
わたしは眉をひそめた。
「ああ、思い入れがあるんだ。あの賞状には。」
「そんな嬉しそうな顔をしなくても。」
父の顔を愉快げに笑っている。
「別に嬉しいんじゃない。」と父は首を小さく振った。わたしが「顔が嬉しそうだけど。」となじると「決して嬉しい出来事ではないんだ。」とそっとつぶやいた。
「ふーん、で、どんな思い入れ？　どうせ、たいしたことなさそうだけど。」
「たいしたことはあるよ。」
父は胸を張った。
「へぇ〜、自信ありげだね。どんな話か聞かせてもらおうかな。」
「はっははは」父は不敵な笑みを浮かべた。その後に「サッカー選手がデジカメ投げる威力ぐらいの衝撃だぜ。」と自分で言った後に噴き出した。
わたしは面食らい言葉を失った。そして、父はほんのりだが涙を浮かべるまで笑っていた。

『実』

あの日は忘れもしない、高校一年の最後の終業式の日だった。
体を激しく揺すられて目が覚めた。
心臓が宙に浮かぶ感覚に襲われ、一気に危機感と焦燥に駆られた。
「実、あんた何してんの？」
二段ベッドの一階に足を掛けてベッドに顔を出した母がいった。
呆れているというよりは不思議な顔でおれの顔を眺めている。
「いま何時？」
「九時過ぎだよ。」
「やばいよ。遅刻だよ。」
「知ってるわよ。いま、先生から電話きているもん。」
「でんわぁ？」
おれは散らかった頭の中を整理できないまま母に聞き返した。だが、母は返事もせずにおれの部屋から出て行った。
時間を見ようと携帯電話を手に取った。メールが二通来ているのと九時を過ぎているのを確認する。八時四十分までに教室内にいなくてはいけないのだから、どうやっても遅刻だ。メールは藤原と名倉からおれの遅刻をからかうメールだった。
そうか、おれはもう遅刻決定者か。不思議と遅刻が決定すると焦りがなくなり、精神的な緊張感が解けたのを楽しむようにボケっと二段ベッドの二階で座って部屋を眺めた。
ベッドが二段ベッドなのは小学生まで兄と使っていたお古だからだ。兄は新しいベッドを買ってもらい、「もったいないから」という理由で古い二段ベッドはおれが引き受けることになった。兄が「下の階が物置になるから便利じゃん」と愉快そうに笑っていたのが気にいらなかったが、二番目に生まれてきた宿命や家の金銭的な事情を考慮すると強く断ることはできなかった。だが、兄の言う通り二段ベッドの下の階は物置になり、中々便利なものだった。

窓際に二段ベッドが設置してあるので手を伸ばすとカーテンレールがある。その上には五冊ずつに小さな塔にされた漫画が五列に整列されていた。遅刻の原因はこいつにある。深夜の四時までこの野球漫画を読み返していたのが原因だ。
正面にはもう一つ窓があり、そのカーテンレールの上には『実』と書いた色紙が飾られている。
「なんで、自分の名前を書いた色紙なんて飾っているんだ？」と兄に怪訝な顔をされたことがあった。「別に特に深い理由はない。ただ、書道の時間に書いたからなんとなく飾っているだけだ。」と答えたが、飾っているには浅い理由があった。

あれは十一月頃だ。つまり、あの『事件』の後のことだ。
「ねぇ、なに書く？」
ドン、ドンと机をリズム良く叩いて悠子がいう。
「えっ」おれは一瞬戸惑いを見せながらも精一杯それを隠しながら「そうだな。」と硯に墨を擦る手を一旦止めて考える素振りを見せていた。
墨の匂いが漂う書道室は騒がしい。書道の担当の教師に威厳がないからなのか、実習ということが生徒に自由を手に入れたと勘違いをさせているのか、書道室は異常に騒がしかった。縦横無尽に歩き回る生徒もいれば、教師に無断でトイレに立つ生徒もいる。五十代の女教師が大きな声で生徒を宥めようとするが「ああ、おばあちゃんが何か言っているよ」と鼻先で笑う生徒が大半だった。
この日の課題は今まで半紙に練習してきた文字を色紙に書いて提出するというものだった。
おれは前回の授業で墨汁を使い果たしたので墨で墨汁を作るところからのスタートだった。懸命に硯に向かって墨を擦りつけているとき、机から音が鳴った。
「やっぱり、『実』でしょ。」悠子が体ごとこちらに向けていう。短いスカートから見える足が白くて細く、綺麗だった。

「なんで？」おれは目を丸くさせ、心臓がとび跳ねた。好きな女の子が自分の名前を発するだけで艶めかしさがあるとは、人間の神秘に触れたような気がしていた。
「なんでって」悠子は嬉しそうに笑った。「だって、君の名前じゃない。」
「ああ、うん。」おれは途方に暮れた声を出す。「そうだけど。」
確かに課題の文字の中におれの名前である『実』は入っていたが、悠子がおれの下の名前を覚えていることと、それを薦めてくる大胆さにおれは戸惑いを隠せなかった。
「そうしなよ。せっかく自分の名前があるんだし。わたしも『実』にしよ。簡単だし。」
おれは悠子の言う「せっかく」の意味がよくわからなかったが「そうだね、せっかくだし」と『実』を書いた。

廊下に出て階段を降りようとしたとき、母の声が聞こえた。
「はい。いました、呑気に寝ていましたよ。すいません。いつも、勝手に起きて勝手に帰ってきて、勝手に寝ているもんだから。本当にすいません。・・・はい。・・・はい。いーえ、今から向かわせますので。・・・いえいえいえ、本当に恐れ入ります。・・・はい、それでは失礼します。」
「電話が来たんだ。」
階段から降りて母に訊ねる。
「そうよ。『実君が学校に来てないのですが、どうしたのですか？』なんて聞かれて驚いちゃったじゃない。」
「ああ、今日は終業式なんだ。」
「知ってるわよ。」母が呆れた顔をする。「先生があんたがいないって言うからわたしは『実なら学校に向かったと思いますけど』って間抜けなこと言っちゃたじゃない。」
それは息子の管理をできていない自分にも非があるのではないか、と反論できそうにもあったが、寝起きでそんな気力もなく「寝坊し

たんだ。」と短く言う。
「見ればわかるわよ。起こしたのはわたしなんだし。」
「うん、そうだったね。」おれは欠伸をして、体を伸ばす。
「本当にマイペースな男の子だね。」母が冷ややかな目で見る。
おれは母の皮肉じみた発言を聞こえない振りをして、冷蔵庫を開けて適当に朝食になりそうな物を探した。ハムととろけるチーズがある。確か食パンがあったはずだ。おれがハムととろけるチーズに手を伸ばしたときに「あ〜」と母が甲高い声を上げた。
「なに？　どうしたの？」おれは顔を顰めて振りかえる。母は椅子に座って新聞を広げながら顔だけこちらに向けていた。
「そういえば、実」
「なに」
「あんた、お兄ちゃんの買ってきたシュークリーム食べなかった？」
「いや」おれは首を傾げた。そして「知らないけど」と白を切る。
「あっそう。」母は目線を新聞に落とした。「お兄ちゃん、すっごい、怒っていたわよ。今日、学校の帰りでいいから新しいシュークリーム買ってきなさい。」
シュークリーム一つで大袈裟な、と思いつつも昨日食べた『ムール』のシュークリームの味を思い出す。あれは兄ちゃんのシュークリームだったのか、と。
「兄ちゃん、そんなに怒ってた？」
「怒ってたわよ。犯人見つけ次第殺すって。」
「そんな・・・」シュークリーム一つで大袈裟な、と今一度思う。
「ああ、怒らせちゃった。」母は新聞に目を向けたまま言った。声の調子は軽やかで、完全におれを揶揄していた。
新聞を読む母の横顔は愉快気で、おれの頭は上で眠る兄のことが気がかりだった。高校三年の兄は既に卒業式を終え春休みに入っていた。おれは兄が目覚めぬうちにハムととろけるチーズを乗せたトーストを平らげ、急いで支度をして逃げるようして家を出た。

覚醒

いつもの定位置は他の誰かに奪い取られていた。終業式ということもあるのか、いつもより自転車が多い気がする。おれはどこかにスペースがないか、自転車を押しながら探し、少し空いたスペースを見つけると、無理やりスペースを開けて、自転車を捻じ込んだ。

誰も歩いていない校舎はいつもとは違う景色に見えた。いつも人で溢れる昇降口前は静かで不自然さすら覚える。「おはようございます」と煩わしい怠慢な挨拶をする教師の姿もない。

靴から上履きに履き替え、体育館の前の渡り廊下の前に立ったとき心の中に憂鬱が芽生えた。長い時間窮屈に立たされ、壇上には校長が陽気に興味のない話しを長々と語る。「コウチョウ、コウチョウ、ゼッコウチョウ」後ろから肩を叩いてまで言う必要があったのか、とつまらないことを言う橋下の顔が頭に浮かんだ。二学期の終業式だ。

再び足を動かし、教室に向かった。教室は鍵が掛っていると予想はできたが、今更校長の話しと橋下のくだらないギャグを聞く気にもなれなかった。

教室に行くには階段を降りる必要がある。昇降口を標準にするなら一年の教室は地下一階にあることになる。おれは教室が一階なのか二階なのかは知らないが、個人的には一年の教室は地下一階のような気がしていた。一年の教室のある廊下は薄暗い。でも、だからといって一年の教室が別に地面の下にあるわけではない。教室に入りカーテンを開けば眩しい光が教室を照らし、外に出れば緑の芝が一面に広がり、その先の階段を降りれば校庭がある。

だから、どっちが正解かと訊かれたら、恐らく地下一階ではなく一階なのが正解ではあるような気がした。だが、本当に一年の教室の廊下は薄暗いのだ。

『V』字の階段を降りると先程まで注がれていた光は影を潜め、一

気に薄暗くなった。目の前には少子化の影響か、使われていない余った教室があり、そこを通過すると六組の教室がある。その先には、五組から順に一組まで続いている。
四組の教室は予想通り鍵が掛っていた。南京錠の付いた引き戸に手を掛けて力を入れる。扉はガタガタと音を立てるだけで、一向に開く気配はない。開かないとはわかっていても試さずにはいられなかった。三月の廊下は寒い。急いで家を出たのでブレザーの下にセーターを着るのを忘れていたので余計に寒い。昨日のシュークリームの味を思い出す。シュークリーム一つで大袈裟な、と今一度思う。セーターを着ていればもう少しマシだったはずだ。この寒さは兄ちゃんのせいだ、と言いがかりとはわかってはいるが思わずにはいられなかった。
「開くはずないでしょ。鍵が掛っているんだから。」
声が聞こえた。声の方に視線を向けると悠子がいた。三組のロッカーにもたれ掛かり、手を背中に回す格好でこちらを向いていた。
「遅いよ。」悠子が口を尖らせる。気付くのが遅いと言う意味なのだろうか、おれは愛想笑いを浮かべる。
三という区切りが良い数字だからなのか、三組と四組の間にはトイレと階段が設置されていた。その為、三組と四組は隣同士ではあるが、少しだけ距離が離れていた。
おれは突然声を掛けられたことに驚いていた。そして、本当に自分に話し掛けているのか、周りを見渡した。
「ふっふふ、話しで聞いたとおり。君に話しているんだよ。」
悠子はこちらに向かって歩きながらいった。おれは意味がわからず混乱する。
「話しで聞いたってどうゆう意味？」
「ふっふふ、どうゆう意味だと思う？」
悠子が笑みを浮かべる。近づいて気付いたことだが、悠子の目は赤く充血していた。また、いつもの悠子と雰囲気が違うような違和感を覚える。

「えっ、誰かからおれの話を聞いたの？」
混乱しているせいか、おれは馬鹿正直に答える。
「さぁ、どうだろう。聞いたというか、見たというか。」
悠子が困った顔をした。どこか、寂しげな表情だった。
「見た？」
「宇宙人ってさ、仕事ないのかな？」
悠子が唐突なことを口にした。なんの脈絡もない会話におれは戸惑いながら「さぁ、おれは地球人だから、宇宙のことはわからないけど、宇宙人にも仕事ぐらいはあるんじゃないかな？」と適当に勝手なことを述べる。
「そうだよね。どうゆう意味なんだろう？」
「さぁ、どうなんだろうね。」
おれは精一杯の想像力を使って悠子の身に何があったのか、考えて答えた。
「わたし・・・覚醒したの。」
悠子は微笑んでいった。おれは『あたし、本当は宇宙人なんですぅ～』と甘ったるい声を出すタレントを思い出し、そうゆう類の冗談かと思った。だが、悠子の表情は散りゆく桜に対しなごり惜しそうに別れを告げる女優のような、そんな寂しげな微笑みだった。
「・・・・・覚醒？」
「そう。覚醒。」
「覚醒って、埋もれていた才能が目を覚ますみたいな、あの覚醒。」
「たぶん、そんな感じ。」
笑えばいいのか、適当に称賛の言葉を贈ればいいのか、おれは咄嗟に色々な考えを巡らせたが最終的には「そう・・・なんだ」と、ただ曖昧な言葉を口にした。
「うん、そうなんだ。」
悠子はゆっくり首を縦に振った。
「そう・・・なんだ。」
おれはもう一度呟き、奇妙なやり取りが繰り返された。

可笑しな空気になってしまったと感じたおれは話題を変えようと、よく遅刻をするの、と訊ねると、悠子は「わたしの遅刻の回数知ってる？」と言ってきた。
「いや、知らないけど、たぶん多そうだね。」
「なんで？」
「なんか、ベテランの空気が漂ってる。」
「ベテランの空気？」悠子は首を傾げて、顔をほころばせた。「確かに、わたし遅刻のベテランだ。」
「どれくらい遅刻してるの？」
「親子講義三回かな。だって、遠いんだもん。家から自転車で五十分だよ。電車でも、駅から学校まで三十分掛るから意味ないし。」
「三回は多いね。」
おれ達の通う高校には遅刻が月に四回あると『親子講義』というものがあった。子どもを遅刻させない為にはどうするべきか、という特別講義に親子で強制参加させられ、子どもの生活習慣を改善させる『改善提案』というレポートを親子で書かされる。この親子講義が開始以来、遅刻が約六割減したという効果があった。『あんな面倒なものを受けさせられるなら、意地でも子どもを遅刻させない』そんな親が多く現れ、子どもを車で送る親も珍しくはなかった。その中でも『親子講義』三回というのは学年トップの藤原の四回に次いで多いはずである。
「だからね」と悠子が言う。
「だから？」
「ハンデを付けるべきだと思わない？」
「ハンデ？」
突然出てきた『ハンデ』という言葉に驚いた。
「そう。ハンデよ。家が遠い人もいれば近い人もいるのよ。なのに、全員が同じ時間に同じ場所に集合って可笑しな話じゃない？」
「そうかな？」
おれは賛成できず、首を傾げる。

すると、悠子は民主主義としておかしい、平等じゃない、とか口にした。じゃあ、どうすればいいのか、と訊ねると悠子はよくぞ聞いてくれた、という面持ちで「全員が同じ時間に家を出ればいいのよ。」と言った。

「同じ時間に家を出るの？」

今度は意味がわからず、首を傾げる。

「うん。タイムカードってあるでしょ。」

「あの、アルバイトとかで使うやつ？」

「そう。あれを学校に導入するの。」そう言って悠子は人差し指を立てた。「生徒全員の家から学校までの距離を計って、各々に決まった定刻を設けるの。」

「それで、タイムカード？」

「そう。わたしはやさしいから先生達の負担も考えてあげているのよ。たへんでしょ。一々『こいつの定刻は八時十分だから、二分遅刻だな。』とか判断するのは。」

「でも、それじゃあ、着くのはバラバラになるんじゃないかな。」

「別にそれぐらいいいじゃない。平等なんだから。」

悠子は『平等』という言葉を強く強調する。

「でも、それじゃあ、あまり意味がない気がするけど。」

「意味ってなに？」

「だって、遅刻は約束の時間に遅れてくることでしょ。約束を破って他人に迷惑を掛けるから遅刻であって、その制度だと、家の近い人間は毎日無駄な時間を過ごすことになる。」

「別にいいじゃない、それぐらい。むしろ、わたしだったら優越感に浸って読書でもするわ。」

「そうかなぁ？」

「そうよ。だって、わたしが呑気に本を読んでいる間、家の遠い人間は必死な顔をして自転車を漕いでいるのよ。」

「うーん、あまり有意義には思えないけど。」

「だって、不思議に思ったことない。人間みんな平等とか言いなが

ら、目の見えない人、耳が聞こえない人、容姿が他の人より優れている人、親が裕福な人、絶対に平等とはいえない物がたくさんあるでしょ。でも、そんなのそう生まれてきたんだから仕方ないって言った終わりじゃない。」

「壮大な話だね。」おれはすかさず茶化しを入れた。

「それと同じよ。わたしのお父さんがここに家を建てちゃったから、わたしは他人より早く起きて、人よりも長い距離を自転車で走らなければならない。仕方ない。」

悠子の熱弁は続く。

「きっと、どこかで『仕方ない』と考えているからよ。だから、今度は『仕方ない』を生徒がバラバラで登校するのは『仕方ない』にするのよ。そうすれば不自然じゃないわ。『わたしが他の人達よりも早く学校に来て読書をするのは家が近いから。仕方ない』『おれが他の人が今頃呑気に読書しているのに必死にペダルを漕ぐのは家が遠いからだ。仕方ない』そんな風に考えればいいのよ。」

「不思議な制度だ。」

「この世界事態不思議なんだから仕方ないじゃん。」と悠子は嬉しそうに笑う。「サッカー選手が愛する彼女にデジカメを投げるくらい不思議な世界だし、今こうして、わたしと君が向かい合っていることだって不思議なんだよ。」

途中の譬えは意味がわからなかったが、確かに不思議だった。遅刻して後悔していても良いはずなのに、おれはいま神に向かって感謝をしていても良いほどに時間を過ごしている。

「確かに不思議な世界だ。」

おれはその意見には素直に首を縦に振った。

「君は初めてでしょ。」と悠子が言った。

「ああ・・・うん。」一瞬なんのことかわからなかったが、会話の流れから、なんとなくおれの遅刻の回数だということに気付き「おれは逆に新人の空気が漂っているかな」とおどけて見せた。

「漫画を読んで夜更かしをしたのが原因だって、そんな空気を漂わせている。」
最初は偶然だと思った。だから、おれは大袈裟に驚いた素振りをした。
「すごい、その通りだよ。」
「野球漫画でしょ。わたし達が生まれる前に描かれた漫画。昔、読んだことあったのに読み返していたんでしょ。」
「え」
「それに、遅刻は初めて。今日遅刻をしなければ皆勤賞を貰えたのに・・・残念」
悠子の顔をさほど残念そうではなかった。どちらかといえば愉快そうだった。
「なんで・・・」おれはさっきまでの会話を思い出そうとした。どこかで自分で言ったのかもしれないと。
「シュークリーム食べたでしょ。」
おれは驚きのあまり、シュークリームという言葉を初めて耳にしたような錯覚に襲われた。「シュークリーム？」
自分で口にして、やっと本来のシュークリームが頭に浮かんだ。ああ、そうだ。この丸くてクリームとシューが絶妙にマッチした食べ物がシュークリームだ。
「セーターを着ていないのは、お母さんのシュークリームを食べたのが原因ね。」
悠子は不敵の笑みを浮かべる。まるで、緻密に練った犯行を名推理される犯人と名探偵の関係だった。
「・・・いや、さっきまでのは正解だけど、おれが食べたシュークリームは母さんのではなく、兄ちゃんのだ。」
おれは戸惑いながらも、弁解をする。混乱していたせいで人前では兄のことは『アニキ』と呼んでいたのに思いっ切り『兄ちゃん』と口にしていた。
「おじさんの？」悠子は目を丸くした。

悠子は急に真顔になり、おれから視線を外して手を顔に当てた。その姿は自分の名探偵が自分の推理に落ち度がなかったか思案をする様子に見えた。
「おじさんじゃないよ。アニキだよ。誰がおじさんだよ。おれのアニキまだ十八だよ。」
おれは悠子が真顔で言うので指摘する。
「え」
悠子がおれに視線を戻して、目を丸くさせた。
「だから、おれのアニキはおじさんじゃないって。」おれは再び訂正する。
すると少し間を置いてから「ふっふふ」と溢れだすように笑い「ごめん、ごめん」と謝ってきた。
「なにがおかしいんだ。」
おれは少しむきになっていった。なんとなく、自分の理解のできないところを笑われるというのは良い気分とはいえなかった。
「いや、ただ」と悠子は言いながら笑うのを止めた。
「ただ？」
「あのシュークリームはお兄さんのじゃないよ。」
「なんでそんなこと断言できるんだよ。」とおれは驚いた。
「だって、わたしは覚醒したんだもん。」
「覚醒って」おれが苦笑すると悠子はもう一つ予言した。
「来年は皆勤賞取れるよ。だから、その皆勤賞の賞状は大切に保管しておいて。」
そのうち一つはすぐに見事的中した。おれが学校の帰りに『ムール』でシュークリームを買って帰ると母がそのシュークリームをその場でおいしそうに食べたのだ。なんでそんな嘘を吐いたのか、とおれが問い質すと、ああ言えばおれが学校に帰りに買ってくると予想ができたと何食わぬ顔で言っていたのを覚えている。

伝言

娘が逝った。

涙を流しながら娘に言った僕の言葉に隣にいた看護婦は不可解な顔をしていた。何を言っているんだ、この親父は。とでも思ったのかもしれない。だが、そう思われても仕方ないと、僕自身も思ったのだから仕方ない。

季節は娘の名前に似ていて春だった。桜が咲いたり散ったり、暖かく穏やかな季節の春に僕のたった一人の娘は死んだ。娘が死んだのは別れの季節である三月のことだった。

正直いえば、ある程度の覚悟はしていた。娘の病状が急激に悪くなったこともそうだが、少し格好つけていえば、運命に足掻くことはできないと思っていた。

『悠』

おれは妻のお腹に宿った子どもの名前の候補を机の上にある紙に書き連ねていた。

あんまり親の希望を乗せるのも気が引けるし、適当に付けるのもよくない。格好の良い名前を付けてあげたいけど、名前負けするのは可哀そうだ。そんなことを考えて、いくつかの候補を挙げていた。

「なにしているの？」

妻が後ろから覗き見て、不思議そうに訊ねてきた。

「子どもの名前を考えているんだ。」

「子どもの名前？」

妻が気が早いと笑う。まだ、男か女かもわからないんだよ、と。

「ベストを尽くしたいんだ。後になって焦って変な名前を付けるのも可哀そうだし。」

「考え過ぎて変な名前を付けてしまうってこともありえるよ。」と妻は心配そうに言う。

「確かに、それも一理あるかも。」

「それで、どんな名前を考えたの？」

「えっと」とおれは紙に書いた一番自信のある「寒太郎」という名前を口にする。

「響きがいいだろ。」

「確かにいいけど・・・そんな歌あったよね？」

妻は上を向いて思い出すように言う。

「そうだっけ？　だから響きがいいんだ。でも、歌があったら、いじめられたりするからな。響きはベストだと思うんだけどなぁ。」

僕が残念だ、と肩を落とすと、妻も本当に残念だね、と一緒に嘆いてくれた。

「実はわたしも考えたんだ。」

妻がおもむろにいった。

「なんだ、考えてるんじゃん。人に気が早いとかいっておきながら。」
僕がなじると妻は笑った。
「どんな名前？」と僕が訊ねると妻はボールペンを手に取り、紙に書いた。
「ゆう？」
僕は紙を見て首を傾げる。
「ううん、違う。これで『はるか』って読むの。」
「『はるか』か。いい名前だね。」と僕は感心する。「男にも女にも付けられる。」
「でも、これは娘に付けたいな。」
妻は照れくさそうに笑う。
「じゃあ、娘だったら『はるか』息子だったら『寒太郎』に決定だ。」
僕がそう言うと妻は『寒太郎』はどうだろう、と眉をひそめた。
「響きがいいんだから、良いんじゃないかな。」と僕は笑う。
そして、「でも」と不思議に紙を眺めた。
「なに？」妻は首を傾げる。
「親がさ、自分の名前の一部を付けるのは珍しくないけど、これはあまりないだろうね。」
「うん、確かに、珍しいでしょ。」
「うん、悠子は親なのに、『悠』の子どもになってる。」と僕は親なのに子どもの子どもだと呑気に笑っていた。

生まれ変わりと宇宙人

確か生まれてくる子どもの名前が『悠』に決まった頃のことだ。つまり、生まれてくるのが女の子だと判明して、僕はなんとなく『寒太郎』を息子に付けることができなくて、安心と残念がない混じりになった複雑な心境のときのことである。

僕はお気に入りのCDを部屋に響かせていて、寝転んで歌詞カードを眺めながら煎餅を食べていた。

「生まれ変わりって信じる？」

悠子がベッドに座りながら、大きくなったお腹を擦っていった。

「生まれ変わり？」

「そう、あの生まれ変わり。馬鹿げた話だと思う？」

「いや、あったらいいなとは思うけど。」

「じゃあ、あったら次は何になりたい？」

「仕事をしなくても、生きていける世界だったら、なんでもいいや。」

僕はすかさず答える。この頃の僕は仕事に追われていて、仕事に対しほとほと嫌気が差していた。

「ふーん、嘘でもいいから、わたしともう一度出会って結婚したいとか言えないわけ。」

「じゃあ、悠子が隣にいて、仕事のない世界。」

僕は訂正する。

「そんなやっつけに言われても全然嬉しくない。」

悠子がそっぽを向いて言う。

「じゃあ、悠子は生まれ変わったら何になりたいの？」

「わたしは宇宙人」

「う、宇宙人？」

僕は驚いて体を起こして悠子を見る。「悠子は宇宙人になりたいの？」

「でも、わたしはただの宇宙人じゃないよ。」
「なに？　目から光線の出せる宇宙人？」
「ふっふふ、なにそれ。地味に面白い。」と悠子は笑う。
「違うの？」
「違うよ、全然。」悠子は首を振った。「わたしは実君が隣にいる宇宙人になりたいの。」
「はっはは、そんなの宇宙人にならなくたって叶ってるじゃん。それに、今度は娘まで生まれんだよ。」
「そうだけど・・・人の人生って短いんだよ。」
「蝉に比べれば長いよ。」僕は煎餅を噛み砕いて言い返す。
しかし、その言葉に悠子の顔が強張った。「ふうん、じゃあ、実君なんか、蝉に生まれ変わればいいのよ」
「なんでだよ。そうしたら、悠子だって隣にいるんだから蝉になるんだぜ。」
「残念。わたしは宇宙人で蝉を飼っている宇宙人だから。」
「なんだよ、それ。ずるいじゃないか。」
「でも、よかったじゃない。蝉には仕事なんかないわよ。」悠子は笑いを堪えて言う。
「でも、せっかく地上に出たのに、七日で死ぬのはな・・・」僕は公園の木の下に転がる、魂が抜けたように軽くなった蝉を想像した。
「あれはちょっと嫌だな。」
「いまだったら、宇宙人にしてあげなくもないわよ。」
悠子はこれが最終忠告だと言った。この手を取らなければあなたは蝉になるのよ、蝉になりたくなかったら、わたしの言う通りにしなさい、と言わんばかりの表情だった。
「すいません、宇宙人でお願いします。」
僕は正座をして、蝉は勘弁して下さい、と悠子の手を取った。
「うむ、素直でよろしい。」
「でも、一つだけ条件がある？」
「条件？」

「仕事というシステムのない宇宙人でお願いします。」
悠子は眉を下げて、仕方ないな、と一言だけ漏らした。

「でもさ」と悠子が言う。
「なに？」
「生まれ変わりでも、変わった生まれ変わりもあるんだよ。」
「変わった生まれ変わり？　宇宙人に生まれ変わるだけでも変わってると思うけど。」
「そんなもんじゃないよ。生まれ変わりにはタイムスリップもあるんだよ。」
悠子はいかにも経験者の口ぶりさった。
「タイムスリップ？　生まれ変わりで？」
「そう、死んだ人間が過去で蘇るの？」
「そんなのあるわけないじゃん。」
僕はすぐには信じようとしなかった。それじゃあ、生まれ変わりじゃなくて、前世だよ、と。
「あるんだなぁ、それが。生まれ変わったら江戸時代だった、ということもあるかもしれないよ。」
「はっはは、そんな馬鹿な。」僕は笑い飛ばす。
「よくいる、予言者というのは、きっと、蘇りなんだよ。」
「じゃあ、悠子も蘇りだ。」
僕はすかさず言う。もちろん、冗談半分で、だ。
「正解。よくわかったね。」
悠子は微笑んだ。その笑顔はいつか見た、悲しげな笑顔だった。
僕はそれ以上茶化すことができなくなっていた。正直言うと、思い当たる節はいくつかあったからだ。
そして、悠子は悠を産んで死んだ。

宇宙人に仕事

僕が『悠』という名前に意味が込められていたのを気付いたのは悠に絵本を読み聞かせたことがきっかけだった。

『くろとしろのやくそく』という絵本のラストを捲ると猫は宇宙人になっているのだ。途中までは悠子から高校の頃に聞いた話通りだった。白猫に纏わりつく嫌みな猫達に黒猫が殺される。そして、白猫が泣く。ここから物語は急変するのだ。後悔をする白猫の元に神が現れる。突飛な展開だと僕は笑った。そして、神は都合良く、白猫の相談を乗る。だが、神は怒る。激怒するのだ。そんなのお前がいけないんじゃないか、周りが気になって自分の気持ちに素直になれない自分が悪いのではないか、と。白猫は驚愕する。だから、あなたに相談しているのではないですか、と。神は考える。そして、結論は出す。なら、お前ら二匹を二人だけの世界に飛ばしてやる。白猫を宇宙に飛ばされる。その姿を宇宙人に変えて。飛ばされた世界には宇宙人になった黒猫の姿があった。白猫は黒猫に言う。「会いたかったわ。」黒猫は言う。「どうして、僕は死んだはず。あれ、君は誰？」白猫は言う。「わたしは白猫。宇宙人に生まれ変わったの。あなた、やり直す為に。」黒猫は言う。「宇宙人？　宇宙人には仕事はあるのかい？」

作者は宮乃という女性作家だった。そして、あとがきには『この物語は死んだ友人に贈る物語です』という文が書いてあった。『素直に気持ちを伝えられなかった友人が神に説得されたように素直になって結婚までした友人を猫に描いた物語です。また、猫が宇宙人に変わるのは彼女が次に生まれ変わるなら宇宙人と断言していたので、宇宙人に生まれ変われるようにと願いを込めて宇宙人に変えてしまいました。さらに、最後の黒猫の台詞は彼女が生前にずっと疑問に思っていたことを黒猫に言わせてみました。』と書かれていた。

「宇宙人に仕事はあるのかい？」

僕はその言葉を口にしてみる。
「さぁ、おれは地球人だから、宇宙のことはわからないけど、宇宙人にも仕事ぐらいはあるんじゃないかな？」
高校生の僕が戸惑いながら答える。
そりゃ、そうだ。宇宙人にだって仕事はあるさ。僕は鼻水と涙を絵本に垂らしながら呟いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4240u/

spiral

2011年7月13日03時28分発行